



《境の熊野神社》

木版画 安藤修二

観光地って？

まだグリーンツーリズム、エコツーリズムと言った言葉が新鮮に聞こえていたころ、10年前のことです。当時、国土交通省の外郭団体、農村開発企画委員会で専務理事をされていた石川英夫先生に「君たちを西日本一、グリーンツーリズムを実践している町に連れて行ってやろう」と誘っていただきました。

そこは京都の中心部から北へ50キロ程のところにある美山町(2006年合併により南丹市美山町)という町でした。立地条件は奥多摩によく似ていて、主な産業は林業、観光の町でした。町のカリスマ助役が私たちを迎えてくれました。助役の話では、美山町は全国一茅葺き屋根の家が残っている町であり、その景観を見るために全国から観光客が訪れる、というところでした。ではなぜ茅葺きの家が残ったのか。助役の説明は、新しく家を建てたくても、貧しくて新築できなかった。しかし結果的に最後列(地域の開発等の意味で)だった町が、回れ右したら、観光的には先頭に立っていた、ということでした。

事実、真冬の厳しい季節にも関わらず、町営の宿泊施設は満室状態で、全国から訪れたアマチュアカメラマンの人たちが、雪の茅葺き屋根の人家を盛んに撮影していました。その茅葺き屋根の家には、生活の息遣いが感じられ、屋根の煙突からは紫色の煙がたなびいていました。

その夜、助役には夕食も同席していただき、いろいろなお話を伺いました。中でも忘れられないのは「君たちのところは、ただの観光地になってはだめだよ。そこに人がいなければいけない」と言われたことです。この言葉には多くの意味が込められていて、今でも考えることがあります。「人がいる」ということはどういうことなのか。私たちガイドも奥多摩を訪れるお客様と、地域をつなぐ役目、その人になることは、そこに人がいることになるのだと思います。人と人とのコミュニケーションから絆が生まれ、その絆の輪をより大きく広げていけば、更に活力ある観光地・奥多摩が見えてきます。

(奥多摩観光ガイドの会 会長 原島 俊二)

とっておきの山歩きガイド

私にとっての山の楽しみ方

「小峰さんの好きな山はどこですか？」と聞かれたら、昨年までは間違いなく「雲取山です」と答えていました。

雲取山は奥多摩の山の中で唯一 2,000m を超え、東京で一番高い山だからです。今まで私は「山は頂上に登るもの、そこに立ってこそ登山と言える」。富士山登山競争をはじめ、御岳山トレイルラン、小菅トレイルランなど山を走って登っていました。山登りは苦しいもの、だから頂上に立った感動が素晴らしいのだと思っていました。しかし、今年からガイドになり私の山登りの楽しみ方が一変しました。お客様を案内して季節、季節に咲く花や、木などの名前を覚え、それをお話しながら、みんなで山道を楽しみ、事故なく安全に登り、案内する。その喜びに目覚めました。

そこでもう一度「小峰さんの好きな山はどこですか？」と聞かれれば、私は「今一番気に入っている山は、東日原から一杯水避難小屋までのヨコスズ尾根です」と答えます。滝入ノ峰までは急な登りが続きますが、そこからは比較的歩きやすくいろいろな植物もあり、夏でも木漏れ日の中、気持ちよく歩けます。また、一杯水から西に向かい西谷山へ行く尾根道も雑木林の中のゆるい登りで植物も変化に富み、知らないうちに

西谷山まで行ってしまいます。一杯水から東へ曲がり仙元峠までの道は、ブナの大木が尾根伝いに群生し、その美しく太い幹や、太く曲がりくねった枝が青空にくっきりと映え、その歴史を感じるとともに、勇気をもらえます。

先日、ヨコスズ尾根で“シュロソウ”と、西谷山への途中で“ホツツジ”を見つけました。以前だったらまったく気づかないで通り過ぎてしまっていたことでしょう。その写真を撮り、必死に図鑑とパソコンで調べ、名前がわかった時には感激しました。
(小峰 一郎)



ホツツジの花



シュロソウの花

山里歩き

数馬の切通しからもえぎの湯へ

白丸駅から踏切を渡り、ゆるい坂道を左下に駅のホームを見ながら上って行きます。道は右に大きく曲がり、突き当たると左に折れます。左に階段が見えてきます。ここで道は右に折れて溪山窯の前を通ります。ここは昔、立場茶屋だった処です。杣入観音堂の前を行くと道が左に折れてすぐに広場に出ます。向かいに見えるのが数馬の切通しで、江戸時代に3年がかりで切り開いたものです。奥行は20メートル位あります。道はこの先の下に見える国道の拡張工事のため切り取られて、今はなくなっています。進んできた道を車道まで戻ります。それを下ると、白丸駅下の駐車場に出ます。

国道を渡ると数馬峡橋です。橋を渡ってすぐに、レストラン・アースガーデンがあります。横の遊歩道を行きます。鉄の階段を上り下りして海沢方面に向かいます。右手に多摩川の溪谷を眺めながら進むと、数馬

西トンネルが見えます。遊歩道から一般道に出てゆるやかに右下に行くと柿平橋際の東屋に着きます。この下にトイレがあり、利用できます。来た道を少し戻り左に下りて発電所の下の方の川を渡り対岸の道を上ると、車道に出ます。この道を右へ下り、海沢大橋の信号で国道を渡り、左折。民宿山田荘の手前で、右の坂を上ってすぐ二又道を右に上がると大山祇神社に着きます。奥多摩町営住宅を過ぎて国道を歩道橋で渡ると氷川トンネルが見えてきます。トンネルを右に見て、そのまま進むと日向の馬頭さまがあり、すぐにもえぎの湯の前に出ます。

(杉浦 重明)

参考地図

奥多摩町発行の山里歩き絵図「7 白丸」「8 海沢」「9 大氷川」をご利用ください。

～ 「四季つづれ」その7 ～

「金袋山のミズナラ」

奥多摩町は巨樹の宝庫である。確認された巨樹の数が全国の市町村の中では一番多い町と言われている。奥多摩は小河内ダムという東京都の水瓶を抱えているため、水源林としてその広葉樹林は保護されているから、巨樹も切り倒されることなく守られてきたし、中でも日原地区は江戸時代以前から御巢鷹山御林とされ、旧幕時代は鷹の雛を巣引いて將軍の鷹狩りの用に供することを目的とする、幕府の直轄林として保護されてきたため巨樹が多い。

倉沢のヒノキ、金袋山のミズナラ、ガニ沢出合のカツラ、名栗沢のトチノキ、大ダワのイチイなどなど、名の知れ渡った巨樹が沢山存在する。中でも金袋山のミズナラの好きな巨樹ファンは多い。私も一番好きな巨樹である。

埼玉県との都県境尾根の滝谷ノ峰（タワ尾根の頭）から南東に派生し、日原鍾乳洞の小川谷に落ち込むタワ尾根は、小川谷と孫惣谷を分かちつ長大な尾根である。日原の一石山神社裏から急な尾根に取り付き奇岩、燕岩の頭に登り上げる。そこまで登ると傾斜は落ち、少し進むと山頂とも分らないほどの一石山である。そこから左がヒノキの植林で右が自然林の緩い登りとなる。この先人形山、金袋山、篤坂ノ丸、ウトウの頭と続き滝谷ノ峰に到るのであるが、この尾根でピークらしい尖りは、都県境の滝谷の峰（1710M）と、ウトウの頭（1587.9M）だけで、あとはどれものっぺりした山頂である。

さてくだんのミズナラは人形山（1176M）のすぐ北側にある。金袋山頂はそれよりたいぶ上にある。ミズナラのある人形山上あたりで尾根が二分するため傾斜が落ち、広い平地となって、ブナやミズナラなどの広葉樹の森になっている。この森が明るいのは、どこのブナ林などにも見られる林床の笹が無いからだ。遠くからでもこのミズナラは目立つ。際だって大きく他の巨樹を圧倒しているのだ。

金袋山のミズナラは樹齢数百年、幹周り7.5m、高さ約25m、そのドッシリした体躯と樹肌は恐竜のティラノサウルスを思わせる。ほぼ平坦地に生えているにも関わらず、傾斜地に生える広葉樹のように50度ほどに傾いて立ち、頭上には大きく口を開いたような瘤を持ち、地上7mほど上で幹が3本に分かれ、それぞれ天を目指している。

東京都水道局水源管理事務所勤務した、樹木に詳しい元奥多摩光ガイド堀越弘司さんに聞いた。この傾きは後天性のもので、たぶん数十年前に強風か何かの原因で倒れ掛かったのではないかと、すでにその頃には地上6mくらいまでウロ（木部が腐って生まれた空洞）ができていたことが見て取れるという。このアクシデントにも関わらず、何とか倒れずに踏みとどまったミズナラは、傾きの反対にあったウロの両側の樹幹を大急ぎで成長させた。板状に育った樹幹部（これをミネと呼ぶ）がダブルの梁の役割を果たし、それ以上に傾くことはなかった。倒れそうになりながらも踏ん張り、その後、特異な樹形を作り出してまでも生きながらえている姿には感動すら覚えると堀越さんは言う。

このミズナラの勇姿は、同じく元奥多摩観光ガイドで版画家の安藤修二さんが彫った木版画が、よくその風格、迫力を表現しているので末尾に掲載したい。

私がこの金袋山のミズナラと初めての対面は平成9年、山岳救助隊員となって3年目のことであった。日原駐在所の前田隊員、奥多摩ビジターセンター島崎自然解説員と3人で登り対面した。その巨体の下に立ち、傾きを必死に支える板根に触れ感動したことを今も覚えている。

その時は金袋山周辺の背丈以上もある篤竹に猛然と突っ込み藪を漕ぎ、ウトウの頭から孫惣谷に下山したのだった。あれからこの巨樹に会いに何回登ったことだろう。私が味わったあの感動を他の人にも味わってほしいと、何人もの知人を案内して登った。そして見る人はみなその大きさと特異な樹形、迫力、風格に感動した。今ではあの格闘した金袋山付近の篤竹は全て枯れ果てて見る影もない。

金袋山のミズナラが折れていると私が聞いたのは今年の暮れである。今年の大雪などもあって登る機会がなく、4月になってやっと友人2人を伴って確認に登った。そして無惨な姿を目にしたのである。上部の3本に分かれた幹の1本は残っているが、他の2本の幹は、特徴ある大きな瘤と共に裂けて剥落し地面に転がっていた。胴体部分には大きな穴が開いてウロの大きさが確認できる。傾いてからも樹幹部を発達させ、倒れまいと必死に頑張ったがウロは大きくなり、ついに支えきれずに先端の半分を剥落させたものだろう。これからはその穴から風雨が直接樹幹に入り込み、ウロの腐蝕の進行を早めることになることだろう。

しかし、下界で樹木医がやっているように、コンクリー

発行 奥多摩町教育委員会

協力 奥多摩民話の会

トを詰めるなどの延命治療はやめてほしい。このように矜持を保ち続けてきた巨樹には尊厳死が似合っている。あと何十年、いや何年もつか分らないが、煌々と照る静かな満月の夜、人知れず巨人が倒れ込むようにドサリと朽ち果てる方が誇り高い金袋山のミズナラの最期に相応しい。

それまで私達はひとりでも多くこの巨樹に直面すれば、数百年の歳月を生きてきたいろいろな自然界のことを語ってくれるだろう。

その1週間後、読売新聞の山好きな宮沢、桑の両記者が、金袋山のミズナラ取材したいということで案内した。ミズナラの大きさを示すため、巨樹の会の了解を得てウッドサークルの中まで入らせてもらい写真を撮った。読売新聞に掲載された宮沢記者撮影の、剥落後のミズナラ写真もここに掲載する。

盗まれた馬頭さま

惣岳河原に臨んだ崖つづちの道脇に、江戸のむかしからわしらの祖先が愛馬の供養のためにと祀った、馬頭さまがおられた。

だが、だれが、いつ馬頭さまを持ち去ったものか、今は台座だけ残されている。

むかし、こんな話があったそうだ。

ある山里の小高い峰に、小さな地藏さまが百年もの昔から、にこやかに里の村人を見守っていられたそうだ。

あるとき、旅の男がその地藏さまの気高い、かわいらしさに魅せられたものか、つい持ち去ってしまった。

都に帰った男は、庭に地藏さまを祀り、毎日、ながめては楽しんだそうだ。

だが、そのときから、病人が出たり、事故があったり、家運もみるみる傾いていったそうだ。

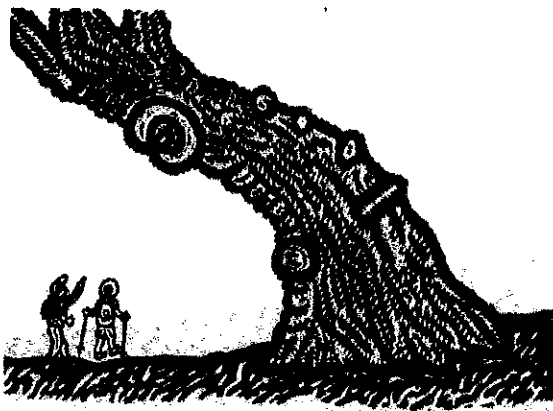
やがて、男も重い病いにかかり、医者からも見はなされるころになって、地藏さまのことが妙に気にかかってしかたがなかったと。

ある日、男は親類の者にわけを話し、「地藏さまをあの山里に戻し、村の人々にわしが詫びていると伝えてくれ」と、すぐに旅立たせた。

地藏さまが山里へ戻った日は、地藏さまのお顔も晴れ晴れと見え、久しぶりのお参りに峰へ登る村人の列も、長く長く連なるほどだったという。

わしら村の者も、ここの馬頭さまを持ち去った者に、おさわりでもあって、今ごろどんなにか難儀をしていることかと安じている。

そして、馬頭さまのお戻りになる日を、一日千秋の思いで待っているのじゃよ。



金袋山のミズナラ

木版画 安藤修二

日暮・龍岩裏の色登後、標高1100mを越えた辺りで感動的な出会いがあった！《幹回り約7.5m》

◎誇り高さ巨樹金袋山のミズナラ(木版画 安藤修二)



◎ 崩落した金袋山のミズナラ (桑記者右と筆者)

朝焼や巨樹にたましひありしころ くにを

(元 青梅警察署山岳救助隊 副隊長 金 邦夫)



奥多摩町の年中行事 10

年中行事(歳時儀礼)は、正月から暮れの大晦日までの一年間にわたる諸行事のことで、農家も林業も商家も例外でなく社会全体の行事であり、生活そのものでした。平成24年の7月から続けてきた年中行事の話も今回をもって終了することになりましたので、残りの分をかいつまんで、お話しします。

- 2月3日 節分 豆まき、いわしの頭を焼きこがし、柗の枝とともに「ぬきなし」(目籠)に差して門口に飾り、魔除けとしました。
- 5日 釣師の水神まつり(日原)
- 3月3日 雛祭り 前日、餅をつき、ひし餅を作り、段飾りに供えました。
- 5日 箭弓神社(川野)の例祭 車人形
- 4月25日 かやと(共有地の草刈り場)の山焼き
- 29日 小丹波の熊野神社例祭 祭りばやし
- 5月4日 鍬神様のまつり
- 5日 端午の節句(こどもの日) かしわ餅
川井の八雲神社例祭 獅子舞
初寅の日 八十八夜の前後の寅の日 雹害と気候安定祈願 おはぎでお日まち
- 6月15日 祇園まつり むかしは、この日に鹿島おどり、獅子舞、神楽などが行われました。
- 7月13日~16日 盂蘭盆 ばたもちを供えました。
- 8月1日 天祖山の山開き
- 9月1日 八朔まつり 二百十日の前後にあたり、暴風除け祈願。

- 8月と9月は、町内の郷土芸能が一斉に行われます。
- 9月15日(陰暦8月15日) 十五夜
子供たちは、「十五夜おくれや」とはやしたてながら家々をまわり、秋の収穫物を貰いました。
- 10月17日 鉄砲まつり(日原)
陰暦9月13日 十三夜
- 11月11日 上の亥の日(亥の子の節句)豆の生粉の団子を藁づとや菜の葉にのせて神棚、祠堂に供えました。
- 20日 恵比寿講(正月と同じ)
- 12月1~2日 お山どめ(日原)
天祖山の立岩権現様が秩父の妙見様のまつりに出かけて留守になるので、その参道(しめぎ)から奥へは、入ってはならないしきたり。
- 22日 冬至 けんちん汁 かぼちゃの煮物
下旬 煤払い
- 28~30日 正月の準備、松飾り、餅つき(米、アワ、キビ) 29日の餅つき、31日の飾りは忌む
- 31日 大晦日(年越し)煮物 蕎麦

[資料] 奥多摩町誌、広報おくたま
(奥多摩郷土研究会会員 岡部 義重)

あの木なんの木

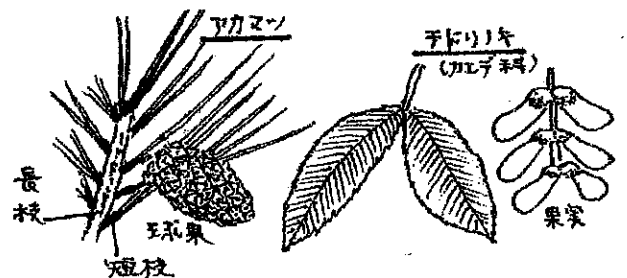
私たちがふだん見なれた木でも、それが意外な所に生えていると、とっさに“あの木なんの木”と思ってしまうことがあります。アカマツは尾根やはげ山でよく見かけます。

道の駅鳴沢近くでは美林をつくっていますし、クロマツの北限付近にあたる宮城県松島では岩場にも生えています。これらはいずれも、乾そうするやせ地という共通点があります。今年の7月、群馬県の玉原湿原を訪れた時のことです。湿原の中の少しだけ盛り上がった土の所に、アカマツが一本枝を張っていたのにはおどろかされました。ちなみに木はすべて、“適当な湿り気”のある所が、生育の最適地なのですが、他の木との競争に弱い木は、乾そうした土地や湿地など他の木が生えにくい所に移って、そこで適応して生活しています。

アカマツは生育に十分な日光を必要とし、他の木との光の競争に弱いのですが、適応力が強く、乾そうやせ地でも生活できます。そのようなアカマツにとって、適当な湿り気のある湿原中のマウンドは、またとない所だったのでしょう。

御岳山のアクバ峠からロックガーデンに下る山道で、チドリノキらしい木を沢山見かけました。

チドリノキ=溪流ぞいの湿った環境という一般のイメージに当てはまらないので、“この木なんの木”と疑いましたが、やはりチドリノキでした。



杖で木のまわりをつつくと、岩石が風化してできた細かいレキが堆積していました。こんな所は水もちも良いのでしょうか。

アカマツやチドリノキが、私たちの先入観におかましくなく、自分たちの最適地を選んだのは、彼らの“直観”によるものだと思いたくなりましたが、皆さんはどう思われますか。

(橋上 一彦)

ガイドだより

～奥多摩むかしみちのみどころ～

奥多摩で最も親しみやすいハイキングコース、むかしみちをご紹介します。癒しの森林セラピー（療法）ロードにも認定されている四季を通じて人気が高いポピュラーな旧青梅街道です。全コース片道約9km徒歩4時間のコースです。コースの概要は多摩川の渓流にそって続く古道です。道はほぼ平坦ですが中山集落へは少しですが登り道になります。四季折々の山野草や山笑う季節の新緑や紅葉シーズンは絶好の行楽地です。

奥多摩駅で下車して商店街を歩きます。国道の青梅街道を右に氷川大橋を渡り商店街を歩き、まもなく右手に案内の看板地図があり、少し先の左がむかしみちコースの入り口です。

いきなりの急坂にさしかかります。ほんの一時です。羽黒坂のすぐ右手に羽黒三田神社の石段があります。やがて道を斜めに線路があり、右手後ろにトンネルが見えます。これは小河内ダムを建設したときに氷川から小河内ダムまでの資材を運搬して活躍したトロッコ軌道の跡です。むかしみちにそって陸橋やトンネルが見え隠れします。

標高400m前後の道を歩くと古くから生活道として居住している民家の前を通ります。また、開けた展望台から山々の景観を楽しめます。思わず「ヤッホー」と叫びたくなります。針葉樹に囲まれた道を歩くと樹木から発散されるフィトンチッドと呼ばれる生理的活性物質を全身に浴び、ストレスから解放され、癒されて森林セラピーの効果も抜群です。

奥多摩むかしみちには多くの名所旧跡があります。歩く道すがら民間信仰の厚かった神仏の石像の馬頭観音や牛頭観音、道祖神、縁結び地藏、耳神様、などが目につきます。現代からタイムスリップして昔を偲ぶことができます。

みどころは、白髭神社の都指定の天然記念物の石灰岩大岩壁、晩秋に見事ないろは楓は樹齢約200年、惣岳渓谷の流れとユラユラと景観を楽しみ渡るしだくら吊り橋、奥多摩をこよなく愛した日本画家の川合玉堂の歌碑、浅間神社、青目立不動尊などがあります。ゴール近くの青目立不動尊から眼下に奥多摩湖が一望できる絶景でいままでの疲れがいつぱんに吹っ飛んでしまいます。何度訪れてもまた来たくなるのが奥多摩むかしみちなのです。

(山口 茂樹)



白髭神社（奥多摩・境）
石灰岩大岩壁
都指定天然記念物

施設案内

「やすら樹の宿 ねねんぼう」

大自然あふれる奥多摩町日原に佇む「やすら樹の宿ねねんぼう」奥多摩駅よりバス利用30分車利用20分で到着。日原のシンボル稲村岩や四季折々の山々の景色を一望、心身ともにリラックスできる宿です。ランチタイムは、そば、うどん、定食メニュー、川魚の塩焼き等が入った御膳メニュー（要予約）、日替わりでおすすめメニューもあります。

宴会やオードブル、お弁当の注文も承ります。ぜひお気軽にお問合せ下さい。

所在地 奥多摩町日原 848-1

電話 0428-82-0788(お食事 11時～2時、4時～7時)

定休日 水曜日不定休

ホームページ <http://kirakuya.info/>

登山・ハイカーの方々へ

- 奥多摩むかしみちは全面開通しました。
- 大多摩トレイル 白丸ダムから数馬峠橋間は現在通行止めになっています。
- 登山の方は早めに下山しましょう。

平成26年度

登山・ハイキング会員募集

奥多摩観光協会では、当協会が主催するイベントの参加者を募集しています。

26年度会費1,000円で年5回参加すれば、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券(700円相当)をプレゼントします。ただし、各回参加費700円。

会員登録は、最初に参加するイベント当日に手続きを行って下さい。詳しくはJR奥多摩駅前にある当協会の観光案内所にお問い合わせ下さい。

電話 0428-83-2152

次号発行予定：平成27年1月15日

発行 奥多摩観光協会
住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210
電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789
編集 名人・達人観光ガイドの会